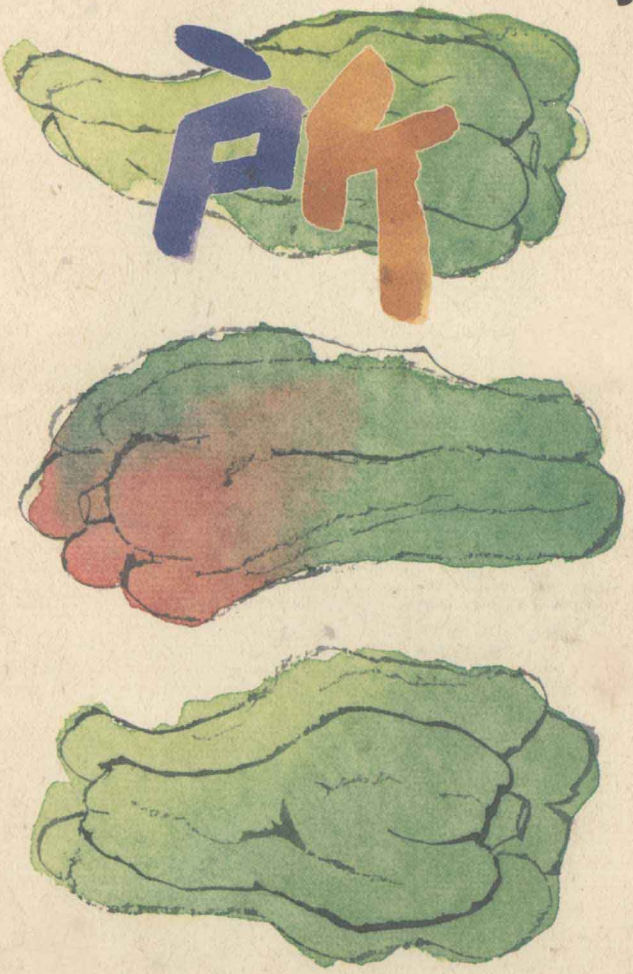
台所

坂上弘

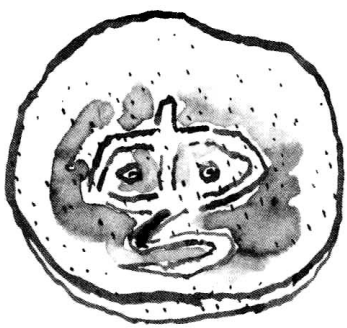


新潮社

台所

坂上弘

江苏工业学院图书馆
藏书章



新潮社

台所（だいどころ）

© Hiroshi Sakagami 1997, Printed in Japan

平成九年七月三十日　発行
平成九年十一月二十五日　五刷

著者／坂上弘（さかがみ ひろし）
発行者／佐藤隆信
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（03）三二六六—五四一一
　　読者係（03）三二六六—五一一一
郵便番号一六二—八七一一
振替　〇〇一四〇—五—八〇八
印刷所／株式会社三秀舎
製本所／大口製本印刷株式会社
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-418601-5　C0093
価格はカバーに表示してあります。

もくじ

台　所……7
電車の中……29
カラの海……57
夏の終りに……85
不　悪……113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仮の宿り・蜜……133
仮の宿り・ある日の雪……155
待つということ……171
佐助の頃――『時間（とき）の園丁』によせて――……187

装画　平松礼二
装幀　新潮社装幀室

台

所

台

所

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

あるとき、友人が「君のお父さんとお母さんは、『轉生』の世界の夫婦だったな」と言った。父母に相次いで他界された私を慰める言葉をかけてくれたときのことだ。彼は、高校時代からの付合いで、私の父母に成長期の頃から会っている。

明治三十六年生まれの父は九十一歳、元気なその日に、のんびり屋の八十四歳の老妻がのうのうと寝坊したうえ、何の役に立つのかわからない化粧をしていたのをにがにがしく思っていたに違いない。彼女はまた、叱言が口癖の夫が蠟燭の火が吹き消されるように去ったので、永の契りにお礼を言う暇もなかったと言った。この母も、三箇月後に細木が折れるように倒れた。二人が約束して逝ったのだろう。

もう一度会いたいものを、あの二人は何に生まれかわるつもりなのやら、と呟いているとき、志賀直哉の『轉生』の話になった。友人と私が、高校時代読んでいた小説類は一緒だった。

直哉の『轉生』では、癇癪持ちの夫と悠々とした妻が、あるとき、生まれかわったら、鴛鴦に

なって会おうと約束する。老いて夫がいなくなって、妻は、鴛鴦だったか狐だったか、どちらも夫唱婦随の生きものの典型だったはず、と頭に残っていた。鴛鴦に違いないと思うが、夫が「お前は、大事なときに間違いをする」と決めつけ、欠点をよくあげつらっていたのも、記憶に残っている。そういう妻だから、鴛鴦はひょっとすると覚え違いで、狐だったかもしれないと疑念も残る。確かめる夫がいなくても、夫のおせっかいは身に染みている。いや、いまや、それを思い出して聞く喜びもある。鴛鴦を狐にとりかえるのは、夫の叱言に従わされてきたときよく反発した習慣を、そのままつかったまでだ。居直りである。

亡き夫との交感において、間違いが起こることぐらい、あなたも知っていたはずと、相手の粗忽のせいにする。これくらいの混迷は、私の母の年齢には大いにあり、自らの性癖にしてはばからない。父がいなくなると母は、あの人は大事なことを何も教えておいてくれなかったと私に訴えた。この可愛らしいずるさが好きでもあったが。

その朝、会社の机で直通電話をとると、母のところへ手伝いにきている光橋しおりさんという中年の女性からで、「ちょっとすぐに来てみてくださいな」ということだった。

執務中なので具合がわるかったが、文房具を買ってくるなどと言い置いて、自分都合の顔になって抜け出し、タクシーを拾った。

十五分ぐらいで親の家の前に着くと、そこには光橋しおりさんと近所に住む民生委員の婦人が、二人で木戸の内側にひっそり立っていた。

週に二度の約束でしおりさんが来てみると、いつもなら台所の内側からの鍵が開いていて入れる手はずなのに、今朝は閉まっている。呼んでも、チャイムを押しても、母が出てこないので、「もしや」と、気味わるくなって、私に知らせたのだと言う。

母の寝起きする座敷に面した荒れ放題の庭に回ると、黒いアゲハが飛んでいた。芙蓉の丈の高い株があって、その一枝は屋根に届くくらいに伸び放題である。

廊下のガラス戸を開け、声をかけながら上りこんで台所まで行ってみると、身仕舞をすませた母親はいつもの椅子に腰をかけ、ガーゼで化粧水のようなものを顔に塗っていた。

耳のわるい人を驚かせないようにするには、要領がいる。私が顔を寄せると、「おや、来たの？」と、首が回らないせいで、かしげた顔をこちらに向け、目で半分笑ったような顔をした。「ああ、ちょっと時間があったから寄ってみたんだよ。また来ますよ」と耳元で言って、私は安心して会社に戻ることにし、台所の外に出た。不断私が立ち寄る時刻は夕方である。「じゃ、またね」と母親の方はあっさりしたものだ。

しおりさんに、「多分、寝坊したんでしょう。耳は補聴器をつけていないから、聞こえないんだ。その補聴器は、朝のうちはつけていないことがよくあるからね」と説明すると、「まあ、よかった。わたしはもう、こればっかりは、一番心配なことですからね」と、しおりさんは家のまわりを掃く手を休めて言った。

「大丈夫ですよ。いつものように入って行って、知らん顔していてください」

母親に事情を説明させようと思っても、彼女の頭の中は、そうはっきりと物事がつながっているものではない。

夕方、私は会社を出ると、また、タクシーに乗って母の家の近所まで行き、スーパーマーケットに入ると、目につく万能葱、莢豌豆、刺身や豆腐のような材料を買って、母の家へ行った。ひとりになって間もない彼女は、心配を余所目に、ひとりの寝起きを好み、子供たちが入れ替りくるのをよろこんでいた。私は食事どきに行って台所に立つのが妙に楽しかった。

食事のための総菜を買ったりする行為は、母と自分とのつながりの中の一時期を思い出させる。私が選ぶ総菜は、多分子供のころ母と一緒に食べたものが中心であるに違いない。

私は、大学に入った年齢で父母の家を出て、今の妻と同棲し始めてから、それきり不肖の生活をきめこんできたので、食事の総菜の記憶と言えば、それ以前のものということになる。その材料選びに、つい買い過ぎてしまう楽しさがあるのは、待っている母に喜んでもらうというよりは、持って行って料理する台所が、この世から取り残されたような、ひっそりした二人きりの空間であるのを思い描いているからだ。

彼女は夫が逝ってから、ひとりで台所にいることが多く、何か緩やかな変化の中でしか生きていないようだ。毎日のうごきに頭がはっきりついて行っている方ではない。その日に息子が来るのは何時なのか、前の日に聞いておいても忘れてしまう。紙に書きとめる習慣は持っているが、書いたものをどこかにやってしまう。そうこうしているうちに、一日は過ぎていくので、空腹が

苦痛になって、店屋物を電話でとりよせてしまうことがある。息子はあからさまに嫌味をいう。しかし、何かを食べないことには躰にわるいということは息子もわかってくれるだろう。彼女の思いはまずこんなところだ。

あの息子は六時ごろやってくる。この頃は日が長くなっているので遅くなることもある。どこかよくわからないが、そう遠くないところに勤めていて、忙しいようだ。スーパーの買い物袋を提げてくるが、いつもその中身が想像つかない。息子はそのときの気分で食料品を買ってくる。

腰を折って外に出なくなった母は、不断夫と自分の食べる物を、木更津の方にある農家に電話をかけて注文し、持ってきてもらっていた。三日に一遍ぐらい届けられる品の中には、季節の野菜や佃煮、米、味噌、醤油などもある。それらが食べ尽くされたわけでもないのに、注文だけは二人分を定期的にするので、母の座っている台所には、いつの間にかそれらの食品が山積みになってしまう。

私は、ひとりになった母の食事をつくり始めてから、それらの食料品を、随分うっとうしく感じた。確かに、それらは目の前にあれば安心できる性質のものだろう。しかし、一人になった老人に季節のものなど、どれだけ食べることができるだろう。その上、母の好物はうなぎと知っているから、木更津の農家の人は、うなぎの蒲焼きまで添えて置いていく。

父が亡くなってから、人材派遣機関の紹介で二日置きに来る光橋しおりさんが、それらの材料を使って料理をして置いていく。煮物やカレーライスが得意なので、母に聞くと、母も煮物やカ

レーライスが大好きだと返事した、ということになっている。しおりさんは、手当たり次第鍋や器の中につくった料理をため置いて、母を安心させて帰る。

私のすることは、それらの置いておいてもしようがない、あり余るほどの「安心在庫」を捨てることから始まる。冷蔵庫の中にまで料理はためてあるので、ことごとく捨ててしまう。

母親は、そのやり方が我慢できないようだ。次の日がゴミの収集日にあたると、息子は、「冷蔵庫の中といえども腐るんですよ」と言ったかと思うと、ポリ袋の中に勢いよくほうり込んでいく。彼女は、唯一の声の出し方のように、ひたすら「だめよ、だめよ」と、悲痛な声を振り絞るが、息子にかなうわけはない。

「足元のものまで捨てられてはかなわない」と言って、彼女は自分の大切なものを捨てられないようにするが、その大切という基準すら、息子の頭からまったく欠落してしまっているようだ。

私は足元を整理して、流しをきれいにした後で、買ってきたものの中から手早くできるものを、一品ずつ皿に移す。後ろの椅子に腰かけている母の前には、円いテーブルがあって、雑然と物で埋まっているので、そのわずかな空間を拭いて、差し出してみる。そうやって、母の最近の嗜好を確かめてみるうちに、どんなものなら口に運ぶかを知ることができる。

母親から見て、息子の手際がどう映るかということを思いながら、食事の支度をする。この無言の駆け引きが彼女との会話である。まず、湯を沸かし、皿を洗って、捨てるものは捨てる。ナマ物から先に食べさせておくことが多い。刺身を出して、それを食べているうちに野菜のゆでも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com